

図書館報

ソフォス

σοφός

No. 42 March 2011

発行 沖縄キリスト教学院図書館
 〒903-0207
 沖縄県中頭郡西原町字翁長777番地
 TEL : (098)946-1236 FAX : (098)946-1237
 URL : <http://www.cejc.ac.jp/library/lib.html>
 E-mail : toshokan@cejc.ac.jp



知の泉

沖縄キリスト教学院大学人文学部長
 山里恵子

調べものをしていたら目に飛び込んで来たものがあった。「持続可能な開発のための教育 (ESD = Education for Sustainable Development) を構築していくためには、大学は世界的な研究や教育の拠点としての役割が期待されている」(小抜隆、小松要吉『大学と学生』、平成22年第78号)という表現があった。大学の教師として自覚させられた。学生の皆さんにも自覚していただいて、その学びが国内外のコミュニティで活かせるように、日々の大学生活に取り組んで欲しいと思った。大学生活で中心になるのは、紛れも無く授業であるが、その授業を豊かにするのに一役買っているのは図書館である。

私が、図書館を生活の中心にした時期があった。40年前、ハワイ大学で学んでいたときのことである。大学には図書館が2つあった。どの図書館にも書架が林立していた。初めてみる、図書の数に圧倒された。授業が始まるや否や、リーディング・アサインメントのラッシュである。テキストは勿論のこと、関連書物のリーディング・アサインメントが次々と与えられた。兎に角、図書館に足を運んだ。検索をしてもあまり意味が分からず途方にくれていると、通路に学生がいるのが見えた。デスクもあり、係員のような方が学生の質問を受けていた。何をしているのか耳を澄まして様子を伺った。自分が調べたい分野で入手したい図書の相談をしていた。デスクの女子職員は、その学生のいろいろな質問に即座に答えていた。その方の自信に溢れたアドバイスに驚き、博識に魅了された。図書館司書の存在を初めて知った。私も恐る恐るデスクに近づいて行った。その図書館司書は、私の日本語訛りの英語を理解しようと懸命であった。顔が熟るのを感じながら、こちらも頑張った。やっとのことで、必要な本があるコーナーにたどり着いた。あれ以来、その司書に感謝しつつ、私の居場所が図書館になった。私は現在、同時通訳に取り組んでいるのだが、もともとの専攻は、「第二言語としての英語教育」である。この分野は、多岐にわたる学びが要求される。言語学、心理学、社会学、社会心理学、社会言語学等である。授業でもいろいろな本が紹介された。聞くだけで目が回るほどであった。遊び好きのアメリカの大学生(映画上)と思っていた私にはこの有様が理解できなかった。彼らは、本当によくこのリーディング・アサインメントをこなしていた。図

書館で山のような書物を次々に借りていく、または、その場で読んでいく。こちらを負けじと読み始めるのだが、3時間かけても3ページしか読めないという大変な状態であった。授業についていくには、読むしかない。帰寮が何度も深夜を回ってしまった。当時、図書館は24時間明かりが点っていた。それほどに、大学は学生へ知的サービスをしていた。2冊の本に目を通す事ができた後の授業は楽しかった。なんとと言っても、ディスカッションへ加わる事ができた(と自分は思っている)。そういう時は、書架の一つ一つの本が知の泉に見えた。このように、私の留学生活は、図書館無しにはありえないものとなった。今でも、その図書館のカードを保存している。

本学の図書館も私にとっては知の泉である。大学教員の義務として論文を書かねばならない。上述したように、私の専門分野は「第二言語としての英語教育」である。国内事情だけでなく、外国での英語教育を確認する事が求められている。論文を書く際、或いは学会発表を手がける際には、必ず図書館を訪ね、最新情報を少なくともジャーナルでチェックしなければ、時流に乗れない。最近、大御所のジャーナルに日本人の名前を見る事がよくある。日本人の英語力が厳しく評価されるなかで、とても嬉しい現象である。

図書館を利用するもう一つの理由がある。絵本のコーナーで夢見心地になるのが好きである。それと同時に、日本語と英語の表現を比較する事ができ、ここでは、うるわしい知の泉を味わう事ができる。子どもへ語る言葉は、日本語にしる英語にしる情緒的である。時には、専門書より、こちらの表現の方が難しいと思われるのも多々ある。保育科の学生が作成した絵本を四大生と一緒に翻訳したことがある。その内容に合いそうな英語の表現を見つけるため、50冊ほどの絵本の勉強とあいなった。最終的にまとまった英語の表現は、いかにもシンプルなものであったが、それに到達するまでのサポートを図書館の絵本が担ったのである。我々の絵本4冊が図書館に納められている。とてもかわいい絵本だと思う。是非御覧下さい。

という理由で、図書館は、大学の教育・授業を支える大きな役目を果たす、知の泉である!!!

(英語コミュニケーション学科教授・第2代図書館長)



宗教改革者全集 ＋ ルター著作集全巻揃う

沖縄キリスト教学院理事長
神山 繁 實

2001年にオランダのTON BOLLAND社から「カルヴァン全集」を購入したが、「宗教改革者全集」を揃えることができなかった。幸い、2010年度「私立大学等研究設備費等整備費」の支援を得て、前者以外の「The Corpus Reformatorum」全巻と「ルター全集」全巻が揃ったことになる。前者は、カルヴァン(John Calvin, 1509-64)、メランヒトン(Philip Melancton, 1497-1560)、ツヴィングリ(Huldrych Zwingli, 1484-1531)と上記に加えて、16世紀宗教改革の口火を切ったルターの著作D. Martin Luthers Werke, (Weimare Ausgabe、マルティン・ルター著作集ワイマール版)を入手した。これらの著作について手短かに紹介したい。

宗教改革(Reformation)は、16世紀の西欧の政治・経済に密接に関連しながら、近代市民社会のエートスの形成に大きく貢献した。この発火点になったのは、1517年のルターの95カ条提題を契機とするもので、西方キリスト教会に生じた宗教改革すなわち宗教的革命であり、後の西欧市民社会の形成の精神的原動力になっていった。

ルターは、最初の頃は、ローマ教会の根底を揺るがすような改革を望んでいたわけではなく、教会の悪弊改革のみを目指していたが、やがて信仰の基準を聖書のみにおくことによって、聖書の証言を唯一の権威として既成の教会を批判するに至った。フランス、スイスなどではツヴィングリやカルヴァンが改革運動に呼応し、政治的には皇帝と諸侯の対立、農民戦争へと発展、政治的、経済的にも新しいヨーロッパが誕生した。宗教的にはこの運動から新しいプロテスタント諸教会と刷新されたカトリック教会が生まれた。

今回購入したルター著作集は、ユニークな特別限定版として1883年に刊行された最も完全なルター全集のリプリントである。これは、ルターの著作を集めたコレクションの決定版で、旧新約聖書の原点からのルター訳聖書、神学、説教、手紙、詩や讃美歌を含む115巻からなり、ドイツ文化のあらゆる領域に及ぼし、研究のためにテーマ毎の検索が容易にできるようになっている。ルターは、宗教改革の中心人物としてプロテスタント教会の源流を作っただけではなく、美しく、単純な歌詞で聞き取り易い典礼音楽を作ったことなどで、文化面においても大きな足跡を残している。また、上述したように、彼の聖書翻訳は、近世ドイツ語の規範の確立に大きく寄与した。本全集は、「そのような宗教史と思想史、さらには文化史におけるルターの足跡の源泉となった著作を網羅しており、きわめて重要な情報源である。

上述した宗教改革者全集のうち、未収集であったルターの盟友であり、代弁者でカルヴァンの友人でもあったメランヒトンの著作集とスイス改革派の第1世代の宗教改革派に属するツヴィングリの著作集で、カルヴァン全集以外のものを指す。特に、ツヴィングリは人文主義

の影響を色濃く受け継いでおり、彼の聖書主義は、ルターのそれとはいささか趣を異にする。宗教改革者全集は、カルヴァン全集を除いて、ドイツの神学者ブレッシユナイダー(Karl Gottlieb Bretschneider)に始められ、彼が1834年に死去するまで主要な編集を行った。

2002年の『ソフォス』にも掲載したカルヴァン全集について、最低限必要な部分を再録することにする。

2002年にオランダから購入した『宗教改革者全集一カルヴァン著作集(Calvini Opera)』は全59巻20冊で、約4万ページに上る大作であるだけでなく、特にその中の『キリスト教綱要』はプロテスタント神学構成のモデルになってきた。この主の著作は、ほとんど古書でしか手に入らず、日本の大学図書館に収納されてる数も限定されている。本著作集は、1863年、Baum—Cunitz—Reuss Brunswijkの編集によってオランダで出版され、幾人かの著名な研究者の手を経て、本学院図書館に搬入されたのである。

それらの内容は、『キリスト教綱要』を中心に聖書注解、書簡、論争文、諸規程集などにわたる。執筆言語は、ラテン語が大部分であるが、わずかではなるが、入門的な信徒向けの本は、フランス語に翻訳されている。彼の代表的な著作『キリスト教綱要』の初版は、彼が27歳の時に出版された力作で、彼の55歳の時まで数回の増補拡大が繰り返され、プロテスタントの右も左も彼の影響を受けた神学は少なくない。20世紀にいたって、ドイツの反ナチ抵抗の思想的支柱となったのは、バルト神学であるが、彼はカルヴァンの神学の系譜を踏む20世紀を代表する最大の神学者である。最近では、日本でもカルヴァン研究が政治学、法律学、金融の面でも取り上げられるようになってきたことは、喜ばしい限りである。これらの全集が、県内大学や研究者に利用できるよう便宜を図りたい。最期に、本学院のために長年にわたって学術的向上のために毎年多額のご寄付をしてくださる田崎邦男前理事長(医療法人社団現会長)に感謝の意を表する次第である。また、私立大学学術研究等整備資金を獲得するためのノウハウをご教示いただいた株式会社雄松堂書店、当学院図書館、当学院総務企画課の諸氏に深甚なる感謝の意を表したい。

(株式会社雄松堂書店の宣伝パンフレットも部分的に使用させていただいた。)

◆宗教改革文献コレクション

Collection of the Corpus Reformatorum and Early Pictorial Bibles. 全15冊



D. Martin Luthers Werke.



Early Pictorial Bible



The Corpus Reformatorum



私の研究から 皆さんに伝えたいこと

保育科准教授

照屋 建太

1. 私の研究

①「亜熱帯沖縄におけるどんぐりの不思議」

大学内の講義でもほとんど話す機会がなかったが、とうとう私の研究について話をする機会ができた。私の研究は一言で述べると「どんぐりの研究」だ。この一言を言うと笑う人もいだろう。しかし、どんぐりは奥深いものなのだ。

研究の出発点は、沖縄にどんぐりがあることを知ることから始まった。小さい頃「どんぐりころころ・・・」と歌を歌うが、身近にどんぐりがなかった。そのため、沖縄にはどんぐりがないと思い込んでいた。しかし、琉球大学農学部に入學し、やんばるで行われた1泊2日の森林総合実習での出来事である。講義の担当教諭と一緒に森林に入り、ある木の前で「これはどんぐりの樹の葉です」と言ったとき、私の中に何とも言えない感情が湧いた。さらに、先生が言った。「このどんぐりを集めておいておくと少しすると穴を空けて虫が出てくる」と・・・これだ！私の研究はこれだ！と思った瞬間であった（元来、私は植物と昆虫が好きであった）。それが私の研究のスタートである。私の研究の決め手となった話をしてくださった先生、それが琉球大学農学部の新里孝和先生であった。それから私はいろいろどんぐりに関する本を読んでみた。実は、沖縄にどんぐりは6種類あることがわかった。マテバシイ、イタジイ（他地域ではスタジイの名称で知られている）、オキナワウラジロガシ、ウラジロガシ、アマミアラカシ、ウバメガシだ。その中のオキナワウラジロガシとアマミアラカシは琉球列島固有種で、さらにオキナワウラジロガシは日本一大きなどんぐりである。ウバメガシは現在、名護市許田に一本ある。数多く生育するのは、伊平屋島と伊是名島である（ちなみに、名護市許田と伊平屋島のウバメガシに出会うことができた。伊是名島は今年度2回行くことを試みた。しかし、私用で行けなかったり、風が強くて船が欠航になったりし、いまだ伊是名島のウバメガシには会うことができない。口惜しい！）。

さらに調べていくと、これら6種類のどんぐりは、シイシギゾウムシが加害すること、そして、それぞれのどんぐりにしか入らないキクイムシが数種、タマバチとガの仲間がいることなどが明らかになった。ちなみに、マテバシイで一番多く見られる加害はタマバチの仲間イタジイやオキナワウラジロガシ、アマミアラカシではシイシギゾウムシが一番多く見られる（ウラジロガシとウバメガシはサンプル数が少ないため、はっきりと言い切れないが、シイシギゾウムシが一番多いものと思われる）。しかし、他地域でシイシギゾウムシは数多く見られる加害昆虫ではない。さらにさらに、シギゾウムシは面白い生態がある。どんぐりを食べて終齢幼虫になったあとどんぐりの皮（果皮）を破って脱出し、土に潜る。多くの昆虫の場合は土の中で越冬し、翌年成虫になって出てくるのだが・・・、出てこない年もある。つまり、1年ではなく2年越し、もしくは3年越しするものもいるのだ。ナゾだらけである。

また、どんぐりのなり方も面白い。どんぐりは毎年同じように生産されるのではなく年毎に多い、少ないと実のなり方に波

があることがわかってきた（豊凶やなり年と言ったりする）。現在、イタジイやオキナワウラジロガシ、アマミアラカシでは、その波があるように思われる。なぜ、どんぐりにはこのようななり年があるのか？ここが面白いところである。これらのどんぐりの生産と加害昆虫については、2010年日本熱帯生態学会のTROPICSと沖縄キリスト教短期大学紀要に掲載した。TROPICSには、マテバシイ、イタジイ、オキナワウラジロガシについて、沖縄キリスト教短期大学紀要には、アマミアラカシについてまとめた。TROPICSに掲載されるまで論文のやりとりは相当な回数に及んだ。そのため論文を書き始めて6年、学会とやりとりをして3年かかった。

どんぐりはナゾがいっぱいだ。一緒にどんぐりについて考えてみませんか？

②「沖縄における保育園や幼稚園の保育環境」

私のもうひとつの研究は、保育園や幼稚園の保育環境を考えることである。その中でも、近年、飼育栽培活動がどのように行われているのか？効果的な飼育栽培活動とはどのような活動か？いのちについてどう考えるかなどである。沖縄県は島嶼であり独自の進化を遂げた動植物が多く生息している。本地域は面積も日本で4番目に小さく、人口は1,396,125人（H17国勢調査推定値より）になる。観光客も年間5,855,100人（沖縄県観光商工部発表）訪れている。2010年は国連で定められた国際生物多様性年でCOP10が名古屋で行われた。昨年は生物多様性について重要視された年である。沖縄でもマングースなどの外来生物の問題が多い。在来の生物の生きる場所は減少していだろう。また、教育機関で飼育や栽培されている愛玩動物や植物は移入種が多い。その点をしっかり考え飼育栽培活動を行わないと、思いもしない場所から移入種を放すことになる。最低限、飼育栽培活動を行うことにした生き物のいのちについてしっかり理解する必要があることは言うまでもないだろう。

2. 皆さんに伝えたいこと

これらの研究を通して私が皆さんに伝えたいことは「不思議なことを追い求める」ことだ。まず、不思議と思わないと何も始まらないからである。例えば・・・そうですね「葉っぱはなぜ緑色なの？」でもよい。真の答えは子どもにしっかり教えることができることだと思う。大人は「葉緑体があるから」と答えるだろう。これは真の答えになるのだろうか？難しいですね。私も答えははっきり出せない。西原町の理科支援に訪問すると子どもたちの予想外の質問に答えきれないことも多くあるのだ。

このようなことから「不思議を追い求める」ことは、身近なことからも始められる。そして、不思議を追い求めることは自分を活性化させるために大切な原動力となる。私は保育科の教員だが、森林生態の研究、保育環境の研究で自分を活性化できる糧を得た。さらに皆さんと会話、論議することで自分が大きくなってきたように感じている。「不思議を追い求める」こと、それは沖縄キリスト教短期大学および沖縄キリスト教学院大学を卒業する皆さん、大学院を修了する皆さんにも、ぜひ、始めて欲しい。頑張れ！そして、大きくなって私たちに会いに来て欲しい。卒業生は私たちの誇りです。会いに来てくれたときも、きっと私はどんぐりの不思議を追い求めています。

（この文章は出張中、電車の中で皆さんのことを考え書きました。）

退職者からのメッセージ



日英語で自己紹介

— Who am I? —

英語科特任教授 前里 光 盛

沖縄キリスト教学院の学生の皆さん!ご卒業並びにご進学おめでとう。

今日のグローバル化時代に大学で学ぶことは、数十年前に比べて、いろいろな面で大きく変わっている。特に外国人との交流という点では想像以上の変化が起きているといえよう。新聞やテレビは、自国のみならず外国のニュースで毎日賑わっている。いつ国内外で、沖縄について紹介をするチャンスに恵まれるか予想できない。私の些細な経験から皆さんに望むことは、「自分は何者か」というテーマで、二つの視点、(1)我(わん)が生まれ島の歴史や文化、(2)自分の創造主(すべての人を照らすまことの光=キリスト)との関連(証し)について、日本語や英語で紹介できるように準備してほしいということである。

周知のように、内村鑑三は「二つのJ」を愛された。一つはイエス(Jesus)であり、あと一つは、日本(Japan)である。「イエスが日本か、私はその何れを多く愛するかを知らない・・・私の信仰は一つの中心を有つ円ではない。それは二つの中心を有つ楕円である。」と語った。(内村鑑三著作集 第七巻、p.171)。彼にとって、「イエスと日本」は彼の信仰の二つの中心であると言うのである。聖書的には、(1)「主を愛すること」と(2)「隣人を愛すること」と理解することができよう。従って、彼の「日本」を私たちは「沖縄」と解釈することが許されるであろう。

今から47年前の夏、私は沖縄の留学生の一人として、アメリカ西海岸のオレゴン州にある大学で約6週間のオリエンテーションを受けた。その間、二泊三日のホームステイがあり、私はあるテレビ局のアナウンサー宅にお世話になった。翌日、さっそく娘さんの小学校へ案内され、生徒たちの前で、「沖縄の紹介」をするように言われ、ビックリ仰天した。しかしながら、NO とは言えない。参考資料なしに30分ほど話したのである。

私は、ワシントンD.C.にあるカトリック系の大学で学んだ。入学して約一年が過ぎた頃、「日本語科」の主催で「日本語に関するシンポジウム」があり、頼まれて「宮古方言における日本語表現」について英語で報告することになった。その準備のために大学図書館や、米国国会図書館(The Library of Congress)が所蔵する日本語書籍に目を通すため二週間ほど通ったことがある。大学図書館は午前二時まで開いており、たいへん有難かった。国会図書館は、朝の八時頃にオープンしたが、すでに長蛇の列が出来ており、少しでも遅れると館内で空席を探すのは容易でなかった。米国一般人の勉学意欲の強さを見せ付けられた思いだった。

大学院在学中の1966年3月頃、東京にオフィスのあった「南方同胞援護会」より派遣された「第二次訪米使節団」の一行と共に、ピンチ・ヒッターの通訳として、ハワイ選

出の上・下院議員や米国防総省等を訪問して、「沖縄の復帰に関する要請」を行った。その時、一晩で「100」頁ほどの英語の要請内容を理解するため、辞書を引きながら徹夜したことは未だに忘れることが出来ない。

復帰前の1968年に、私は本学英語科の専任として教えるようになり、2005年に定年退職した。その際、慣例として最終講義をすることになった。さて何をテーマにしようかと判断に迷った。私の専門外ではあるが、宮古出身者としてどうしても見過ごすことの出来ないテーマがあった。それは琉球王府によって宮古と八重山の人々に対して課され約270年間も続いた「人頭税」制度についてであった。この問題について、首里バプテスト教会員であられた宮古出身の渡久山寛三氏が著された『島燃ゆ』(1985)を読んで私の魂の中に熱いものを感じた。以来、20年ほど自分なりに古本屋を巡り歩いて資料を収集した。この人頭税廃止運動の指導者の一人、新潟県出身の中村十作師については、ある程度の資料を見つけたが、あと一人の沖縄本島出身の城間正安師についての著書がなかなか見つからなかった。昭和7年(1932)に出版されたその本『隠れたる偉人』を、沖縄県公文書館で発見した時の喜びは、筆舌に尽くし難いものであった。

私は英語科の特任教員としての二カ年間、「英語聖書講読」のクラスを前・後期に担当して、短大と四大の学生たちと共に楽しく学ぶ機会を得た。テキストは、本学の学長であられるスラッシャー先生が書かれた *Themes from the Bible* を用いて、英問英答方式で講義を行った。なお、ホームワークとして、英文学者の寺沢芳雄氏が編著された本、『名句で読む英語聖書』(2010)の中に紹介されている新約聖書から引用された、146句を日本語と英語両方で書かせ提出させた。その作業があまりにもハードであったため、学生たちはわたしを羊の皮を被った狼だと評している。しかし、学んだことは全部あなた方の財産になるんだぞと大声で反論した。これらの聖句を通して、学生たちが真の創造主を見出せれば幸いである。

本学院の図書館職員の皆様には長年大変お世話になった。貸して下さった英語関係、沖縄の歴史、キリスト教関係、その他の書物をとおして多くのことを学ぶことができた。さらに、特任教員としてのこの二年間も、「英語聖書」関連の論文や著書の入手方法をめぐって多くのことを教えてもらった。心から感謝申し上げる。

最後に、学生たちが、「わたしはだれか」『Who am I?』を自ら問いつつ、沖縄の歴史や文化について、さらには創造主なるキリストとの個人的な関係について、日英語で紹介できるようになれば、人間としての喜怒哀楽を実感しつつ、日々充実した生を送ることができると信ずる。

チャレンジ! タンデガー・タンデ!

(初代 図書館長)



沖縄キリスト教学院図書館の変遷

～ 首里キャンパスから西原キャンパスへ ～

図書課長

宮元 和子

沖縄キリスト教学院(沖縄キリスト教短期大学)は1957年に首里当蔵町に設立されたが、大学の知の殿堂としての機能を十分に果たせるような図書館はまだ整備されておらず、首里教会の一角に図書室を設けて学生や教員たちの便宜を語っていた。沖縄キリスト教短期大学図書館という立派な看板を掲げることができるようになるには、開学から数十年を待たねばならなかった。それまでは図書室と呼ばれて、ほんの申し訳程度の規模のものであった。

首里キャンパス時代の沖縄キリスト教短期大学図書館は、現在の西原キャンパスにある図書館に比べると規模は格段に小さいものであったが、図書館の利用頻度は高く、閲覧室は学生たちでいつも賑わっていた。所蔵冊数3万冊程度であったが、画期的なこととしては、夜間の8時まで開館していたことと、県内の他の大学の図書館に比べて、いち早く地域社会へ開放(オープンライブラリー)したことである。

その当時は蔵書の情報検索はカード目録がすべてであり、カード目録の作成はもっぱら手書きのガリ版刷りでしていた。しかし、カード目録に頼っていた情報検索に刷新の機会がおとずれた。1987年には、大城宜武館長の下、Data-Boxによる開発をして、他の県内図書館よりも比較的早い時期に、コンピュータを使って図書の登録や検索を可能にした。すなわち、書名検索、著者名検索等が容易にできるようになり、管理項目も一目瞭然になった。

1989年に、キャンパスが西原へ新築移転したが、2004年4月に4年制大学(沖縄キリスト教学院大学)が設置されると「沖縄キリスト教短期大学図書館」から「沖縄キリスト教学院図書館」と改められた。更に、40周年記念事業の一環として、本学の設立と運営に多大な貢献をされた宣教師を称え、「WALTER W. KRIDER 記念図書館」と改称された。図書館は新キャンパスの中心部にあり、「祈りつつ学び、学びつつ祈る」場としてチャペルとともに本学教育のシンボリック的存在になっている。

西原キャンパスに移転した後の図書館は、コンピュータの急速の発展に伴い、図書館業務が簡便化され、蔵書の拡充をはじめ、図書館に関わるすべてのものが充実してきた。例えば、1997年3月に蔵書管理から貸出管理、会計・統計処理業務の管理項目まで行うローカルシステムとしての「情報館」を導入した。その結果、蔵書検索が便利になり容易になった。また、現、国立情報学研究所(CiNii)が構築する学術情報システムに同時に参加し、全国の大学図書館等が所蔵する情報源がWeb上で簡単にアクセスする事が可能になった。

それから、1997年インターネット接続と同時に、図書館ホームページを開設した。Web上にOPACを立ち上げ、学内外から図書館の全所蔵資料検索が可能になった。更に2008年4月大学院(異文化コミュニケーション学研究科)の新設に伴い、グローバル化、情報化時代に

対応するため、夜間開館時間の延長と図書館利用の見直しを全学的に図った。

なお、本大学図書館が特に力を入れているのが、「建学の精神」を反映する「キリスト教関係資料」の収集である。現在、県内随一のキリスト教資料センターを目指して関係文献の収集に力を注いでいる。「キリスト教コーナー」の一角に初代理事長兼学長を務められた仲里朝章先生の名を冠した「仲里朝章文庫」がある。仲里先生の貴重資料の数々、すなわち、日記・ノート・原稿用紙(手稿)等を昨年3月に、ご遺族から寄贈していただき、実現したものである。2011年度から資料のPDF化に取り組み、5カ年計画で全資料のデジタル化の計画があるのは特筆に値する。

さて、本大学図書館のますますの繁栄を願って、いくつか提言を申し上げたい。まず、緊急に対応が必要なのは、電子化への積極的な対応と大学の特色を活かした貴重書類等の電子化、および地域社会への貢献である。更に充実した大学教育を支援するため、図書館は大学の学術情報発信拠点として教育サービス機能を強化すべきである。そのためには、利用者のニーズに対応可能な高度の専門性を有する大学図書館職員の確保と育成が急務である。繰り返しになるが、地域社会への貢献、情報リテラシー教育推進のため、高度な専門性を有する人材の確保・育成は不可欠である。

本図書館の中長期基本計画(2011年度～2016年度)5カ年計画においては、学習環境の整備の必要性が説かれている。個人学習室、集団学習室、インターネットブース、AVブース、さらにミニエレベータの設置等、改装設計が施されている。現在の図書館は中2階構造でワンフロアのため、音が響くのが難点のひとつである。それも含めて改装していただければ幸いである。

振り返ると、これまでお仕えした歴代の図書館長を務められた先生方及び良き同僚たちに恵まれ、つつがなく図書館業務をこなすことができたものと感謝している。また、本大学図書館の基盤づくりに邁進された故新見宏先生と漢那憲治先生にも敬意を表する次第である。

もっとも記憶に残る仕事のひとつは、『沖縄キリスト教学院創立50周年記念誌』の編集業務に関わったことである。歴代の図書館長のうち、山城真紀子先生、大城宜武先生、そして仲地弘善先生が編集委員長を務められ、我々図書館のスタッフも企画、編集、発行業務等、一丸となって参画させていただいたのは身に余る光栄である。

最後に、学生諸君に提言があります。本学図書館の基本理念、「あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネによる福音書8:32)という定礎が図書館前にあるのは、ご存知の通りです。その定礎の前で足を止め、刻まれている言葉を熟読し、考えるひとときを持ってください。これまでの38年間、いろいろとお世話になりました。本当にありがとうございました。

図書館委員からの一言



英語学習に、是非GRを利用してください！

英語科教授 作田 真由子

皆さんは、Graded Readers (グレイデッド・リーダーズ) のことを知っていますか？小型で、せいぜい数ミリ程度の薄さの英語の読み物です。本学の図書館は学生さんたちの英語力向上のため、数年前からこの読み物を多く購入しています。内容は、文学のクラシックから、最近の映画やTVドラマの原作、ノンフィクション、世界の有名な都市の紹介など幅広く網羅しています。

graded (=等級をつけた) と銘打たれているとおり、このシリーズの工夫されているところは、難易度によってグレイドがつけられていることです。例えば、Penguin Readersは、レベルがEasystarts~6まであり、Easystartsでは、使用されている見出し語は200語程度、レベル6なら3000語程度です。英語を楽しく勉強したい人は、自分のレベルにあったところからはじめて、だんだん上のレベルのものを読むようにするとよいでしょう。

さて、従来、図書館に入っていた主なGRは、Penguin Readers, Macmillan Guided Readers, Cambridge English Readers, Oxford Bookworms, Heinemann, Collinsなどでしたが、昨年さらに、Scholastic ELT Readers (46冊) と、R. I. C. Original Readers (54冊) を購入しました。

Scholasticシリーズは、話題の映画、海外の人気TVドラマ、漫画スタイルのオリジナルストーリーや実話などを含んでいます。The OC や、Buffy the Vampire Slayer などがあるかと思えば、Jane Austin原作のPride and Prejudice (『高慢と偏見』) や、Charlotte Brontë原作のJane Eyre (『ジェイン・エア』) などの古典も入っています。このシリーズはCDもついているので聞いて楽しむことも出来ます。学生さんたちもCDをよく借り出しているようです。

R. I. C. Original Readersは、『フランケンシュタイン』、『海底2万マイル』のようなクラシックをはじめ、世界中から集められた事件、災害、ホラー、ミステリー、SF、短編集を含むシリーズです。

GRの良い点は、自分のレベルに合わせて多読を始められること、お話がこの先どうなるのかワクワクしながら読んでいっているうちに、自然に英語力がついていくことです。多読に興味がある人は、多読で英語を楽しく攻略する方法を薦めているこの研究会のサイトを訪れてみてくださいね。(参照:英語多読研究会 <http://www.seg.co.jp/ssss/>)

ついでに宣伝しておきますと、図書館にはGR以外にも、ハリー・ポッターシリーズや、ダレン・シャンシリーズ、Newbery Honor Books (毎年、アメリカ児童文学に最も貢献した作品に与えられる文学賞に選ばれた作品) シリーズなど、面白いものがたくさん入っていますので、是非、楽しみながら英語を勉強してください。

学生からのメッセージ



図書館利用

英語科2年次
仲村綾佳

私は小さい頃から本はあまり読まなかったし、図書館というところすごく堅いイメージがあり今まで図書館にあまり通ったことがありませんでした。しかし大学に入って友達とレポートや勉強を図書館でやるようになってから図書館で本を読む機会が増えました。そういった事を通して学生のうちは本をたくさん読む時間を作ることが大切だと感じました。というのは社会に出ると自分を表現する場が増えるのでそういった時にどういった言葉で自分を表現するのかという事が必要になってくるからです。又色々な人と触れ合う機会があるので価値観の違いにどう対応するかを考えなくてはならないと思います。そういった時に本を読むことで様々な視点から物事を見ることができ視野が広がるということや表現力を身につけるといった点で本を読むことが必要だと感じました。しかし、社会に出ると本を読む時間を作ることには大変ですし図書館に行く機会もあまりないと思います。なので後輩の方々にも学生のうちにたくさん本を読む機会を増やしてほしいです。



学生・親業・図書館

保育科2年次
奥間鈴乃

私は高校を卒業後、9年間企業に勤めて、キリ短に入学しました。最初のころは、保育科の課題の多さに正直驚いた。私にとっての図書館は課題を一つ一つ乗り越えるための資料収集と勉強の場所であった。資料収集がスムーズにいくようになってからは、図書館での勉強はスムーズに進み、分からないことも全て解釈できるようになった。

また、私は家に帰れば、親業をこなしながら育児をし、育児と勉学の両立が難しく、朝早く図書館に行き、勉強することが私の日課となっていた。その日課が私を少しずつ成長させ、学びの深い勉強へと変えていった。

この2年間を振り返ってみると図書館は私を成長させる場所であると同時に私が夢をつかむためのきっかけが図書館であるということを感じさせてくれた。

図書館での勉強や本との出会いや思い出を大切に、生涯現役でいられるように常に学ぶ姿勢を持ち続けたいと強く願う。図書館は友達のような存在だった。



図書館奨学生を終えて

英語科2年次
仲村渠 望

私は図書館奨学生として二年間図書館で働かせて頂きました。この二年間で、私の中の本に対するイメージは大きく変わりました。もともと本を読むことに対する苦手意識があったのですが、本の受入作業・配架作業をしているうちに、自ら進んで本を手取るまでになりました。今では、図書館で読書することは私にとって最高にリラックスできる時間となっています。

図書館には、読書をする人、課題をする人、資料を探す人など毎日沢山の利用者が訪れます。普段話す機会のない他学科の学生とも交流を深めることができました。また、図書館の職員の方々やアルバイト生と過ごした時間は私にとってかけがえのないもので、仕事の時以外でも相談に乗ってもらったり、お喋りをしたり、冗談を言い合ったり、ここには書ききれないほど沢山の思い出があります。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

もし、まだ図書館を利用したことが無いという学生がいたら、ぜひ勇気を出して利用してみてください！そして本を借りてみて下さい！きっと何かが変わるはずですよ。

学内著作活動



(2010年4月～2011年3月)

青野 和彦

1. 「ラス・カサス De unico vocationis modo 第5章の布教理念 — 第7節と第19節の洗礼理解に基づく考察—」、『神学研究』第58号、関西学院大学神学研究会、2011年3月
2. 「ペドロ・デ・コルドバ『キリスト教の教え』(1544年)における先住民観 —「本性的平等性」の解釈を手がかりに—」、『沖縄キリスト教短期大学紀要』第39号、2011年3月

内間 清晴

学術論文(共著論文)

(1) 国際誌

1. “Resistivity and Thermopower of $\text{Ho}(\text{Co}_{1-x}\text{Al}_x)_2$ – Effects of Pressure and Magnetic Field—”, Kiyoharu Uchima, Chojun Zukeran, Ai Nakamura, Nozomi Arakaki, Syota Komesu, Masataka Takeda, Yoshinao Takaesu, Masato Hedo, Takao Nakama, Katsuma Yagasaki and Alexander T Burukov, *J. Phys. Soc. Jpn. (to be published)*
2. “The pressure effect on transport and magnetic properties of $\text{Nd}_{1-x}\text{Tb}_x\text{Co}_2$ ”, K. Uchima, Y. Takaesu, S. Yonamine, A. Kinjyo, M. Hedo, T. Nakama, K. Yagasaki, Y. Uwatoko and A. T. Burkov, *J. Phys.: Conf. Ser.* 273(2011)012130 他4編

(2) 紀要・他

「シーソーヒーティング法を用いた高圧力中における熱電能測定」; 琉球大学理学部紀要(2011年3月) 他3編

口頭発表

(1) 国際学会(共同発表)

1. “Resistivity and Thermopower of $\text{Ho}(\text{Co}_{1-x}\text{Al}_x)_2$ ”, *International Conference on Heavy Electrons (ICHE2010), (2010,9) Tokyo Metropolitan University, Japan.*
2. “The pressure effect on transport and magnetic properties of $\text{Nd}_{1-x}\text{Tb}_x\text{Co}_2$ ”, *International Conference on strongly Correlated Electron Systems (SCES2010), (2010.6) USA (Santa Fe, New Mexico).* 他3回

(2) 国内学会(共同発表)

ラーベス相化合物 $\text{Y}_{1-x}\text{Nd}_x\text{Co}_2$ の圧力中および磁場中の電気抵抗 日本物理学会2011年年次大会(2011.3), 新潟大学. 他11回

喜舎場 勤子

1. 「琉球新報」2010年4月18 - 5月23日(連載計6回) イギリスの就学前教育

北原 秋一

1. 「寸談余話:産・官・学の分野で得た経験生かし沖縄の人財育てる」財界九州2010年7月号NO.1030
2. 「巻頭言:型そして形」NIACニュースレター2010年秋号NO.110(引用論文等)
3. 「産業連関分析ハンドブック:P228北原研究論文(2002年)引用、P397参考文献に掲載(北原秋一:産業連関分析視点による土産品に関する考察:環太平洋産業連関分析学会第13回大会論文集) 穴戸駿太郎監修.環太平洋産業連関分析学会編.東洋経済新報社2010年12月発行

照屋 建太

1. (本) 嶋崎博嗣, 小櫃智子, 照屋建太 編(2010)保育士養成のための必須科目シリーズ 保育内容(環境)一藝社
2. (論文) Teruya Kenta, Shinzato Takakazu, Kinjo Kazuhiko, Sasaki Takeshi and Nakao Toshio(2010)Annual fluctuation and seasonal falling pattern of mature acorns of the beech family and their acorn-infesting insect fauna on subtropical Okinawa Island *TROPICS* 18(4):pp231-249

本浜 秀彦

1. 「手塚治虫とオキナワ」『春秋』(春秋社)2010年4月号、5月号、6月号、7月号
2. 『手塚治虫のオキナワ』(単著)(春秋社、2010年7月)
3. 「手塚治虫と沖縄①「マンガの神様」の謎を解く」『琉球新報』2010年7月8日付文化面
4. 「たかがマンガ、されどマンガ——場所と身体——」『(沖縄県立博物館・美術館公式カタログ)「沖縄マンガ」展』(文化の杜共同企業体、2010年7月)
5. 「手塚治虫のオキナワ」『手塚治虫オンデマンド・マガジン』(手塚プロダクション、2010年7月)
6. 「『死者』としての手塚治虫」『すばる』(集英社)2010年9月号
7. 「書評 山里勝己著『琉大物語 1947-1972』」『国際沖縄研究』(琉球大学国際沖縄研究所)2号 2011年2月
8. 『役割語研究の展開』(共著)(くろしお出版、2011年3月)

2010年度主な図書館関係行事

◎「2009 こんな本読んだ」推薦図書展

期 間：2010年5月25日(火)～5月29日(土)
 場 所：沖縄キリスト教学院図書館1Fロビー
 内 容：学内の学生・教職員が愛読書を紹介(小冊子A5版)



◎聖書フェア

期 間：2010年12月3日(土)～13日(月)
 場 所：沖縄キリスト教学院図書館1Fロビー
 協 力：(財)日本聖書協会・沖縄キリスト教書店
 展示内容：各国語の聖書・ベッテルハイム聖書及び資料他
 パネル展示(聖書が出来上がるまでの工程)



◎平和学講演会「戦争と教育」

講師：城間祥介 牧師
 (沖縄バプテスト連盟宮古バプテスト教会名誉牧師仲里朝章
 初代学長・理事長の師弟)

日 時：2010年6月25日(金)16:30～18:00
 場 所：シャローム会館1-1教室



◎特別講演会「首里城の独自性と素晴らしさ」

講 師：西村貞雄氏(琉球大学名誉教授・本学院評議員)
 日 時：2011年2月26日(土)14:00～16:00
 場 所：シャローム会館1-1教室

◎「首里城の独自性と素晴らしさ」資料展

期 間：2011年2月21日(月)～28日(月)
 資料提供者：西村貞雄氏(琉球大学名誉教授・本学院評議員)
 場 所：沖縄キリスト教学院図書館1Fロビー
 展示内容：西村貞雄著作論文・パネル展示
 首里城正殿龍柱(縮尺1/5)



◎城間祥介「沖縄戦スケッチ」展&「沖縄戦資料」展

内容：那覇の10・10空襲のスケッチ
 沖縄戦に関わる図書の展示
 期間：2010年6月21日(月)～30日(金)
 場所：沖縄キリスト教学院図書館1Fロビー



— 2011年度新規購入雑誌 & データベース —

◇ 2011年度新規購入雑誌

- ・『財界九州』(月刊) 財界九州社
- ・『モト』—琉球・沖縄の時代と世代をつなぐワンテーマ・マガジナー(月刊) 編集工房 東洋企画
- ・『月刊保育とカリキュラム』(月刊) ひかりのくに
- ・『ポット』(月刊) チャイルド本社
- ・『picclo ピッコロ』(月刊) 学研教育みらい
- ・『保育のひろば』(月刊) メイト

◇ 2011年度新規導入データベース

- ・Academic Search Premier EBSCOhost オンライン全文データベース
- ・Britannica online Japan
日本語の『ブリタニカ国際大百科事典』と英語の Encyclopaedia Britannica をベースとした多言語百科事典
(最大6ヶ国語)オンラインサービス
- ・Literature Online 文学作品フルテキストコレクション(8世紀～現代)



◇ 2011年度購入中止(和・洋)雑誌

- ・The Kenyon Review New series(季刊)
- ・World Englishes(季刊)
- ・American Literature(季刊)
- ・Social Work(隔月刊)
- ・Zeitschrift für Theologie und Kirche(季刊)
- ・U.S. News & World Report(月刊)
- ・Child Development(隔月刊)
- ・Child development perspectives(隔月刊)
- ・神学思想(月刊)

◇ 2010年度『論集』・『紀要』発行!!

2010年度『沖縄キリスト教学院論集』第7号
 —山里恵子教授 退任記念号—
 2010年度『沖縄キリスト教短期大学紀要』第39号

